

## 令和7年度第3回豊明市地域共生社会推進委員会議事録

日時	令和8年1月23日（金） 14:30～17:05
会場	豊明市共生交流プラザ 北館3階 活動室1
出席者	委員：三矢勝司、綾部六郎、森頭子、森紫歩、青木廣康、糸魚川幸江、斎藤純恵、川津昭美、森田峻介、小田典夫、寺本郁夫（以上11名） 豊明市：共生社会課長、共生社会課長補佐、協働推進担当係長、担当職員（2名） 傍聴者：0名

### 議 事

#### 1 委員長あいさつ

#### 2 前回のふりかえり

事務局より資料1「令和7年度第2回議事録」、資料2「策定スケジュール」に基づき説明

#### 3 本日のゴール共有

事務局より資料3「本日の目的とゴール」に基づき、本日の会議の目的と進め方について説明

#### 【委員の意見や質問とそれに対する事務局回答】

- ・ 本日の委員会で資料6、7の内容が固まれば、指針の素案が決定されるという理解でよいか。
  - その理解でよい。委員会で案を作成後、行政内部での調整を経て、パブリックコメントで市民の意見を募る流れになる。

#### 4 協議事項

##### ◆豊明市地域共生社会推進指針の策定について

事務局より資料4「前回からの主な修正点」、資料5「豊明市地域共生社会推進指針（案）」、資料6「施策の論理構造」、資料7「施策の評価指標」に基づき説明

— 質疑・意見交換

#### 【委員の意見や質問とそれに対する事務局回答】

- ・ 資料6の「アクティビティ」は具体的な「アクションプラン」に相当するのか。
  - 今回の指針は、目指すべき社会の変化である「アウトカム」を固定し、それを達成するための「アクティビティ」は状況に応じて柔軟に見直していく（PDCAサイクルを高速で回す）ことを特徴としている。現在記載されている内容は現時点での案であり、効果が見込めなければ来年には全く違う内容に変わる可能性もある。
  - この指針に基づいてKPIを設定し、運用・見直しを進めていく。別途個別の計画が策定される想定ではない。

- ・ アウトカムの項目「必要な支援へのアクセスへの権利の保証」の「保証」の漢字はこれでよいか確認してほしい。
  - 確認し、適切でなければ修正する。
- ・ 市民活動の指標として区長連合会や「カラット」が挙げられているが、行政の目が届かない多様な市民活動（例：趣味のサークル）の活力をどう捉え、施策に反映していくべきか。また、高齢者はスーパーやドラッグストアなどには必ず足を運ぶ。民間事業者を巻き込んだ施策展開は有効ではないか。
  - 行政が関与しないところで地域社会が豊かになることが理想である。行政が知らない地域活動を把握・訪問し支援する活動を「アクティビティ」に加えるか、多様な市民活動が生まれる状況を「アウトカム」に位置づけることを検討する。また、委員の提案を受け、インプットに「事業者」を明記するか、コーディネーターのアクティビティとして「事業者への働きかけ」を明確に記述する方向で検討する。
- ・ 第3章の基本理念にある「普通に暮らせる幸せ（ウェルビーイング）」という表現について、「ウェルビーイング」や「普通」が何を意味するのか定義が不明確。「普通」という言葉は特定のマイノリティを苦しめてきた歴史があり危うい。また、「多様な立場、境遇」という表現も、プラスの意味の「多様性」なのか、困難な状況を含む「様々」なのか判断しづらい。
  - 「普通に暮らせる幸せ」は市長のキャッチフレーズで、「その人らしく生きることを大切にすする」という意味であり、一般的な「ノーマル」を目指す意味ではない。誤解を招くなら、その趣旨の補足説明を加えることを検討する。「多様な立場、境遇」については、「様々な」という表現に修正を検討したい。
- ・ 施策を達成するための具体的なインプット（誰が、どこで、何を、いくらで）や組織体制を明確にする必要がある。ターゲットを明確にし、例えば外国人市民ならリーダーを引き入れるなど具体的な人物を巻き込むべき。コーディネーター不足なら具体的な養成講座の計画を示すべきだ。
  - 指摘は計画の実行可能性に関するものと理解した。計画書に予算や人員数までは記載できていないが、今後のモニタリング過程で示せるよう反映を検討したい。
- ・ 複数の計画を統合し「指針」とする背景や、「計画」と「指針」の違いを市民に分かりやすく説明する必要がある。また、KPIに基づく見直しだけでは不十分で、社会変化に応じて課題仮説そのものを根本的に見直す視点が必要だ。
  - ご指摘の通り、指針策定の背景について、もう少し盛り込めるか検討したい。
- ・ 30・40代の子育て世代といった新しい地域活動の担い手を後押しする前向きな視点が欠けている。また、外国人住民は助け合う力が強いという分析に対し、なぜ行政が「コミュニティ形成支援」をするのか、施策とのつながりが見えない。さらに、3つの計画を統合したことで「協働」の要素（NPOと行政、公民連携、地域協働）が薄まっている。
- ・ 全体的に「困っている人を支援する」課題解決型に偏りすぎている。市民の創造性を引き出し、活動が自発的に生まれる「活動創造型」の支援が必要だ。
- ・ 計画の焦点を「個人が豊かになること」に置くのか、「地域社会が豊かになること」に置くのかを明確にすべきだ。個人に焦点を当てすぎると話が終わってしまう。
  - 市民一人ひとりの幸せのために地域社会を作るという意味合いであり、相反するものではないと考えている。

- ・ 「アウトプット」という言葉が誤解を招く。「炭鉱のカナリア」として捉えるなら、より実態に即した言葉（例：モニタリング指標）に変更すべき。また、モデルのインプットが個人、機関など異なる主体を混在させており混乱を招く。
  - ▶ アウトプットやKPIの数値は目標値ではなく、社会の変化を察知するための「炭鉱のカナリア」のようなアラートとして捉えている。経年でのトレンドを見て取組みを見直すきっかけとしたい。
- ・ ロジックモデルは、市民を計画に参加してもらう「客体」として扱っているように見える。市民がまちづくりの「主体」として、自発的に意欲が湧き出るような仕組みや受け皿が見えない。また、モデルは「ありたい姿（アウトカム）」から逆算して行動を考えるものなので、その見方を補足説明した方がよい。
  - ▶ ロジックモデルが行政計画であるため、行政の活動を主語にせざるを得ない構造上の限界がある。しかし、市民がまちづくりの主体であるという視点をどう表現していくかが課題だと認識している。
- ・ 市民を主体にするための「機会づくり（インキュベート機能）」がロジックモデルに見当たらない。また、「子ども」や「教育」といった未来を作る視点が欠けている。子どもたちが未来の豊明市について考える意見交換の場などが欲しい。
- ・ カラットに機能が集中しているが、公民館なども活用すべき。栄町方面の住民はカラットを利用しにくいというアクセス問題もある。時間的制約から全てを反映するのは難しいだろうから、計画に余白を残し「今後の課題」としてはどうか。
  - ▶ 公共施設のあり方やアクセス問題は全庁的に検討すべき課題と認識している。本日いただいた意見の全てを最終案に反映させることは難しい。このロジックモデルは今後も継続して作り続けていく「バージョン1.0」と位置づけ、来年度も引き続き検討を進めたい。

## 5 その他

- ・ 本年度の委員会は今回で最後となる。次年度の開催については改めて連絡する。
- ・ 今回の指針の最終案については、後日メール等で委員に共有する。

以上